

第1回文化芸術推進基本計画推進委員会 議事要旨

日時：令和7年10月6日（月）
午後6時00分～7時15分
会場：庁議室

次 第

- 1 開会
- 2 委嘱状交付
- 3 委員及び事務局自己紹介
- 4 議題
 - ① 委員長、副委員長の選出
 - ② 文化芸術推進基本計画の進捗状況
 - ③ 文化芸術の推進について
 - ア NPO法人昭島芸術文化団体メロディーの和理事長 石井 亨氏
 - イ 意見交換
- 5 その他
- 6 閉会

配布資料

【配布資料】

- 1 昭島市文化芸術推進基本計画推進委員会要綱
- 2 文化芸術推進基本計画（概要）
- 3 令和6年度文化芸術推進基本計画における主要施策の進捗状況一覧

出席者（敬称略）

委員長・・・新谷尚紀（昭島市文化財保護審議会委員）

副委員長・・・児玉 真（一般財団法人地域創造）

委員・・・大澤俊則（昭島市文化協会）、上岡健人（昭島郷土芸能協会）、堀井真理子（一般社団法人昭島観光まちづくり協会）、本間ゆかり（公募市民）、加藤由子（公募市民）

欠席（上野美樹（昭島市民会館文化事業協会））

事務局・・・池谷企画部長、村山企画政策課長、中村企画調整担当係長、小島主任
磯村生涯学習部長、小林市民会館・公民館長

1 開会

2 委嘱状交付

○各委員に対し委嘱状交付

※委員の任期は令和7年10月6日から令和9年3月31日まで

3 委員及び事務局自己紹介

4 議題

(1) 委員長、副委員長の選出

○事務局より、委員長には新谷委員、副委員長には児玉委員の選出を提案し、全会一致で承認を得た。

(2) 文化芸術推進基本計画の進捗状況

○事務局より、事前配布した「令和6年度文化芸術推進基本計画における主要施策の進捗状況一覧」の資料について委員からの意見がなかったことの報告を行い、今後の意見の受付方法について案内した。

(3) 文化芸術の推進について

委員長・・・ それでは、本日の議題であります「文化芸術の推進について」につきまして、事務局から説明をお願いします。

事務局・・・ 議題としてあげさせていただきました、本日の講話及び意見交換についてご説明させていただきます。

本委員会におきましては、計画掲載事業の前年度実績を踏まえた個々の評価に終始するのではなく、特定の専門分野で活躍する有識者を委員会にお招きし、10か年計画の中間年の見直し、次期計画の策定に向けた新たな発想につなげるような意見交換等ができればと考えております。

今回はその有識者といたしまして、石井 亨先生をお招きし、広く文化芸術の推進についてお話しいただき、委員の皆様と意見交換をしていただきたいと思いますと考えております。

石井先生は国立音楽大学音楽教育及び専攻科を卒業後、付属高校、大学にて後進の指導にあたる傍ら、合唱曲の作品も手掛け、教科書、曲集に多数掲載されました。

現在は国立音楽大学名誉教授、NPO法人昭島芸術文化団体「メロディーの和」理事長、リトミック音楽教育研究所所長などを兼任されています。

昭島市におきましても、小学校校歌の作詞作曲を手掛け、令和6年の市制施行70周年記念式典コンサートでは、公募市民の皆様が石井先生の指揮のもと、先生が作詞作曲された「あきしま我が街」などの合唱を披露していただきました。

委員長・・・ それでは石井先生よろしく願いいたします。

石井講師・・・ 本日は、音楽と文化についてお話しします。

昭島市には伝統文化は様々ありますが、私も昭島に住んで40年は経ちますが、自分から見に行こうと思わないと、なかなか接する機会がありません。普通の人には、大体そんな感じだと思います。どんな伝統文化があるか知らずに過ごす人が大半で、それは大変残念なことです。私も拝島大師や日吉神社ぐらいしか知らないのですが、そこで様々な催しを見ていると面白いです。優れた文化財や伝統文化を大事にしていくのがいいと思います。

音楽には、文化が反映されるものです。また、文化は音楽を形成するものです。これは、なかなか学校では教えてくれません。なんとなく、特定の人

しかお祭りや行事等に参加していない印象です。高度な機械文明があり、人と人が話をしなくなり、交わりが少なくなったのが原因ではないかと思えます。

「音楽は文化を反映し、文化は音楽を形成する」、それに驚かされた話をします。音楽は色々な性質をもっています。人間と同じです。音楽を知るためには、色々なことを覚えなければなりません。今でも、世紀を超えた伝統のクラシック音楽を聴いたり、演奏したりしています。

遠い昔、労働と音楽は非常に結びついていました。畑仕事や木を伐りながら歌を歌ったり、豊作を願って踊りを踊ったり、そういうプロセスがありました。音楽が、全部生活と密着していたのです。その中で、「レントラー」という舞曲がありますが、農民の踊りのことです。ドイツの農民が、長いブーツを履いて、向かい合って踊る三拍子の踊りです。ベートーヴェンの「レントラー」という曲がありますが、三拍子で激しい曲です。

また、バロック時代の宮廷の踊りとして、メヌエットやガボットがあります。メヌエットの踊りは、宮殿に2人で手を取って入ってくるもので、ほこりが舞うので、あまりバタバタしない、静かな踊りです。ガボットも同じような曲です。

日本にもそのような古い音楽があります。例えば、民謡や古謡と呼ばれるものです。民謡では、ソーラン節や長野県の木曾節などがあり、労働と関係があるものです。ソーラン節は、北海道のニシン漁で、網でニシンを獲る作業のときの歌であり、木曾節は、河でいかだに乗り、下流に向かって木を運ぶときの作業歌から来ています。

また、小さな子が歌うような、「ずいずいずっころばし」、「とおりゃんせ」など、動きを通して歌を歌うと、とても楽しいですね。動きを通さないと、楽しいこともあまり楽しくなくなってしまいます。これはリトミックとも合致するものですが、音楽を理解しようとするとき、体を動かすことで、本当の音楽を身に着けることができるのです。自分の身体が音楽にならないと、楽器を弾いても、歌を歌っても、それが生きた音楽にならないのです。それが、リトミックの思想です。体を動かすことは、とてもいいことです。知らず知らずのうちに、子どもたちはその楽しさを知っていきます。知らず知らずのうちに身につけている、それが文化だと思うのです。文化は、あまり頭を使わないものです。頭を使ってしまうと、「音楽」ではなく「音が苦」になってしまう。

音楽は、楽しいという意味をもっています。もともと中国の言葉ですが、それを流用して日本でも使っています。「音」は聞こえるものすべての「おと」のことです。「楽」は「たのしむ」と書きます。「楽しむ」というのは、ダンスや踊り、遊びを称して「楽」といいます。音楽は、「音を楽しむ」というのが本当の意味です。

このように、身に付いたものを伝承して文化につなげ、様々な芸能や技術の発展にもつながっているのです。

少しさかのぼると、明治時代には文明開化で、それまでの音楽が西洋音楽に変わっていきます。伊沢修二などをご存知でしょうか。彼らが、西洋に行って音楽を学んできて、それを日本に持ち帰ってきて、子どもたちの教育に取り入れたことで、初めて洋楽がさかんになりました。色々な幼児・小学校

用の童謡ができ、教科書に載せる曲を作るため、瀧廉太郎や山田耕筰などが作曲に携わりました。子どもたちは、その曲を自然に歌っていったわけです。現在、皆さんがカラオケで歌うような曲は全部洋楽なんです。「ヨナ抜き音階」から、「ドレミファソラシド」になったわけです。

要するに、学校教育の中に音楽が入ったわけです。最初は、楽しもうと思っていたものが、教育の中に組み込まれたため、「音が苦」になってしまいました。子どもたちの中には、音楽が大好きな子もいれば、苦手な子もいます。小学校・中学校と学んでいても、譜も読めない子がいます。歌うのは、今は叫びの歌ばかりで、音が繰り返され、刺激的な歌が多いです。刺激的ではありますが、音楽的ではないです。私なんかは、子どもの心がすさんでいるのかなと思ってしまいます。

いつも私が作るのは、「やさしい」曲を意識しています。言葉も「やさしい」、曲調も「やさしい」、そしてすぐに覚えられるものにしていきます。また、イントネーションや言葉のもつリズムをいつも考えています。例えば、「夏が来れば思い出す」という歌い出しの、中田喜直さんの有名な曲ですが、「なつがくればおもいだす」、ちゃんとそういうリズムになっているんです。息をついて、次のフレーズに移る、これが音楽なんですね。音をよく感じるのが重要です。きれいに歌わなくてもいいんです。この曲はどう歌おうかなと考えながら歌えるように、子どもたちを育てていく、それが文化につながるのかなと思っていきます。音や言葉のリズムがなかなか一致してこないというのが、今の教育現場では難しいところです。

童謡も、手をつないで、あるいは手をたたいて、あるいはぐるぐるまわりながらなど、動きを伴った歌の方が面白いですね。それが小学校の教室の中でやるとなると難しいのかもしれない。それが一つの問題点なのかなと思います。

もう一つ、私が困難に感じているのが、親や友達と共通する歌がないということです。昔、お母さんと「夕焼け小焼け」を歌った、そういうことができなくなっています。アニメや漫画の歌、そういうテレビで聞いている歌ばかりで、親は歌えないことが多いです。一緒に歌うことによって、その歌を楽しんだり、いいなと思って聴いたり、それがうまくいかないのが現代です。

日本語は、美しくやさしい言葉です。そんな言葉を丁寧に教えてあげることができないのかなと思います。やさしい、楽しい気持ちになれるような、そういう音楽ができるといいなと思います。

現代は、「断捨離」という言葉が一般的になっていますが、歌も古いものはどんどん捨てられていってしまいます。そうではなくて、「夕焼け小焼け」でも上手に指導すれば、子どもたちが歌ってくれるのではないかと思います。歌の意味がわからない、情景が頭に浮かばないという問題があります。そういう指導の仕方をしないと、本当の意味での音楽の楽しさを伝えられないのではと感じます。

日本の音楽でも同じことがいえます。三味線や琴の音楽、笛や太鼓の音楽、色々ありますが、ただ音が鳴っているのではなく、太鼓を夢中で叩いている人を見れば、きっと感動するはずですよ。三味線も弾いてもらおうと、すごく静かな感じがしますし、琴もいろんな情景を創造できるものだと思います。

す。断捨離をせずに、興味をもって聴いてもらいたいと思います。

一つだけおかしな話をします。シーボルトは萩の国（山口県）にいましたが、帰国の際、このピアノを萩に住む豪商熊谷家に贈りました。日本で誰もピアノを見たことがなかった時代、贈られたピアノの弾き方もわからなかったものですから、ピアノを舞台の前（下）に置き、弾く人が舞台の上から座布団を敷いて座りながら弾いていた。そんなお笑いの話もあります。

芸能や伝承のものをやろうとしたら、保存するのも大変お金がかかります。市の力を借りて、市民も一緒にやらないとうまく残っていかないと思います。現代の合唱団もそうです。みんな苦労しているようです。指導側はボランティアのようなものになっています。少しでも補助してくれるとうれしいです。市の方へお願いしたいです。

本日はありがとうございました。

委員長・・・ ありがとうございます。それでは、今の石井先生のお話を受けて、皆さんに一人ずつ順番にご意見、ご質問等を伺いたいと思います。

上岡委員・・・ 言葉の意味がわからないとか、情景がでてこないとか、楽しさにつながらないとかは、まさにそのとおりだと思います。実際の風景を見たことがないと、イメージがわかりやすいですね。

お料理も同じで、例えばこんな料理を作ってほしいと言われても、その料理を食べたことがなければ、どんなものかわからないと作りようがないです。実感として、経験があるというのは大切だと思います。言葉も変化してきてしまうため、字面だけだとわからないものもあります。

うちの妻が子どものころに「ふるさと」の童謡を聴いたとき、「兎追いし」の歌詞を聴いて、兎はおいしいのか？食べられるのか？と疑問に思ったそうです。また、「赤い靴」の曲で「異人さんにつれられて行っちゃった」という歌詞を「良い爺さんにつれられて…」だと思い、幸せな歌だと思っていて、意味が変わってしまいますよね。これは笑話ですけど、言葉がわからないと、ちゃんと伝わらないということですね。やはり実感をすることや体験が大事だと思います。

私は、郷土芸能の委員として実際にお祭りなどに参加していますが、実際にお祭りに見に来ていただき、面白そうだなと感じていただき、やってみて楽しいと感じていただく、それを見て周りの人が喜んでくれると、また別の人が見てくれて、やってみたいと思ってくれる、そういう共感をしてもらうことが大事だと思います。伝統を伝承するのが難しいという話がありましたが、私たちも難しいと思っています。実際に触れあってみること、体験してもらうことが後世に文化をつなげていく一つのポイントだなと感じました。

堀井委員・・・ 先生の話聞いて、2つほど思ったことがあります。1つ目は、三味線や琴のような日本の伝統的な楽器をやる人が少ないのは、やはり経験できる場が少ないからなのかなと思います。先生がおっしゃっていた、体を動かして音楽を理解することというのが大事なのだと思うと、実際に弾いてみる機会を、大人が子どもたちに作ってあげることが大事なのだと思います。

もう一つは、最近盆踊りが若者に人気で、60年代、70年代の音楽を流して盆踊りで踊ることが流行っているそうです。時代に合わせて大人が工夫すれば、

盆踊りも日本の一つの伝統ですが、そういった伝統文化を若い人たちに抵抗なく受け入れてもらえるのではと思います。若い人たちが「この曲知っている」といって踊って見たら実際に楽しかったとか、文字のごとく、「音」を「楽しむ」のが「音楽」ですので、時代に合わせて音楽を楽しんでいくのがいいのかなと思いました。

石井講師・・・ 今の話で思い出しました。小さい頃、近所に三味線を弾く方がいたのですが、婦人会の集まりで、その方も三味線を持って地方と一緒に旅行に出かけました。旅行先で私が「サンタルチア」を歌ったのですが、その方が三味線で即興の伴奏を弾いたのです。和楽器でも、洋楽が弾けるんですね。例えば、三味線でみんなで「サンタルチア」を弾くとか、そういうことは学校でもできると思います。和楽器は、経験がすごく大事です。経験は長ければ長いほどいいです。専門家なり長く経験している方に、直接教えてもらうというのが大事だと思います。

大澤委員・・・ 今日、昭島市老人クラブ連合会で体育大会がありました。高齢者なので、簡単な運動しかしないのですが、最後に全員 400 人弱で、昭和公園の陸上競技場で和踊りを踊りました。隣同士知らない人ですが、手をつないで、踊りを知らない人もいますが、見よう見まねで民謡に合わせて踊りました。それがすごく楽しくて、盛り上がりました。やっぱり、音楽は楽しくないとダメなんだなということをお話を受けて、実感しました。

石井講師・・・ 何をやるにも楽しいのが大事ですね。楽しんだ経験がもとになり、それが専門的な方向に進んでくれば、文化が伸びてくる、芸術になるのだと思います。

委員長・・・ 石井先生は歌がお上手だったということで、上手だから好きというのはわかるのですが、下手な人でも楽しめるものでしょうか。下手でも上手な人のものを聴くのは楽しいです。自分からやりたいタイプではなく、そうできない子に教えるとき、先生の場合はどうしていましたか。

石井講師・・・ 音楽大学に在学していても、音楽が好きではないという子もいます。ピアノを習っていたから入学してしまったとか。好きな子は夢中でやっています。私の場合は、褒められた経験がきっかけかもしれないです。例えば、お母さんからきれいだね、上手だねと言ってもらえると、子どもは本当にそう思うのではないのでしょうか。

加藤委員・・・ 褒められるという面では、私は絵を親に褒めてもらったことがきっかけで、今現在、絵を学んでいます。昭島市の伝統文化ですと中神の獅子舞が有名ですが、昨年、舞手として入ったばかりの高校生に始めたきっかけを尋ねたところ「かっこいいから」という答えが返ってきました。獅子舞をやるのが楽しいと言っている同級生を見て、自分も参加してみようと思ったそうです。家族や周りの人から褒められることもそうですが、身近なところに気持ちを動かすきっかけがあると良いなと感じました。

本間委員・・・ 音楽とは少し違うのですが、先ほどのお話の中で、日本語は美しい、やさし

い、という話がありました。私は、正しく日本語が話せているかいつも不安なのですが、美しい日本語を忘れずに、また先ほどおっしゃっていた断捨離もせずに、これから若い人たちに受け継いでいけたらいいなと思いました。

上岡委員・・・ 日本は自然が豊かだから、言葉の表現も多いですね。色にも様々な表現の仕方があって、単純に「赤」ではなく「茜色」など色々な表現があります。日本人は言葉の数が多い分、感覚が繊細なようです。聞いた話ではありますが、欧米の化粧品会社では、商品開発をする際に、パネラーとして日本人を必ず入れるみたいです。塗ったときの皮膚の感覚など、表現が細やかであるため、繊細な表現ができるのが日本人であると言われていたそうです。

石井講師・・・ 日本人の音楽家は、外国によく勉強に行きますが、日本人は技術的にも、声の発声にしても非常に上手なのですが、表現が下手であると言われる。それに対して、韓国人は表現が上手です。日本人は、控えめです。大きい声を出さなくても生活できていたことが影響しているのかもしれないですが、表現がそういうところで小さくなってしまっているのがありますね。

委員長・・・ 昭島市の公民館に行く機会があるのですが、結構市民の方が集まって合唱などの活動をさかんにされている印象です。

石井講師・・・ 昭島の土地柄かもしれないです。農民が多かったからかもしれないです。そういう意味では、あまりしゃべらないです。地域とかそういうところで変わってくるのだと思います。私は八王子出身ですが、織物屋だったので、工場の織機音がうるさかったの、自然に声は大きくなりました。

副委員長・・・ 石井先生には、私が普段考えているような話をさせていただきました。
やはり今は、すごく単純化した世界になっていると感じます。日本人の細やかさや多様性が失われつつある気がします。学校教育についてもそうです。ではどうしたらいいのかというと、「芸術」というものは、すごくかっちりした、正しい、専門的というイメージがありますよね。それは大事なことでありますが、一方で、音楽を聴くのは嫌いじゃないけど歌はちょっと…、歌うのは楽しいけど聴くのはちょっと…など色々な感じ方をする人がいます。音楽でも、その人の得意な楽しみ方を探すのが大事ですが、それを個人でやるのは難しいと思います。あちこちに多様な活動があって、自分に合った場所さえ見つけられれば、活動場所を市内で作っていけるような体制があれば、全体としてはよくなっていくと思います。

また、「中間集団」のような小さなコミュニティを大事にして、その中の人間関係で褒め合ったり認め合ったりするのがいいです。学校の先生も褒めてはくれますが、上下関係があるため、どうしてもヒエラルキーができてしまいます。自分が楽しめて、周りの人も認めてくれるようなヒエラルキーのない中で、集団で楽しめる機会をどうやって作っていくか、市としても考えるべきだと思います。

私が音楽の分野で、最初はマネージャー業をしていたので、偉い人たちしか知りませんでした。これではまずいと思い、いわゆる普及プログラムをやり始めました。音楽家の方には、技術を磨いて、立場も偉くなって、という一つの

生き方があります。一方で、みんなが楽しめるような仕掛けをしていく、石井先生がやっていることもそれに近いものがあると思いますが、普及プログラムのなものを音楽家と一緒に作り、音楽に詳しくない人にも楽しみを共有するのがいいと思います。

美術でも、ただ鑑賞して見ているあまり楽しくありません。昔、1つの絵を前にして3分間立ってられるかというチャレンジをしたことがあります。私は立っていただけませんでした。知識がない人だと、何をみていいかわからないので、辛くなってしまいます。音楽でも、クラシック音楽はつまらないという人はきっと同じ原因かもしれません。美術では今、対話的鑑賞というのがさかんになってきていますが、そういうものを取り入れていくなか、伝統文化でもやれるはず。そういう手法をうまく取り入れて、市がある程度カバーするようなやり方でやっていかないと、個人ではできないことです。自分の得意分野で、狭いところではやれるけれども、広がらないです。そういう機会を作っていくのが大事だと思います。

委員長・・・ 石井先生のやっている「NPO法人昭島芸術文化団体メロディーの和」について教えてください。

石井講師・・・ コロナの前に「メロディーの和」を創設しました。若い音楽家を育てたいというのが根本にあります。声楽家で、プロとして時々活動している人などが所属しており、フルートなどの楽器もそろえ、現在は20人くらい団員がいます。ときどき、市民会館などで音楽会をやったりしています。音楽会は、昭島観光親善大使である桂笹丸氏に司会をしてもらい、やさしい曲も混ぜながら、楽しめるように工夫しています。ぜひ一度ご来場ください。

開催場所のひとつであったフォレスト・イン昭和三館のチャペルでは、ホテルが閉館されたため、開催できなくなってしまいました。昭島には、なかなかいいホールがありません。昭和三館のチャペルがとてもよかったです。響きもよくて歌いやすく、グランドピアノもあったのですが、残念です。市民会館も、改修工事の影響でしばらく使えなくなるため、色々な団体が困っている状況です。

副委員長・・・ 全国共通の悩みではありますが、文化政策としての行動指針がない場合、活動場所を市として確保するのは難しいことだと思います。逆に言えば、はっきりと目標を立てて、活動の中身を考え、みんなで場所を探すことは、そんなに難しくはありません。大した場所でもなくても活動はできます。本当に芸術性が高いものをやる場合は、それなりにいい場所が必要ですが、親しみをもってもらい、楽しんでもらうことを目的としているなら、場所探しはみんなにやってもらい、市の方では一種の活動指針のようなもの示すことが大事です。市が、ハードにお金をかけるよりも、ソフトにお金をかける方向にシフトする時期なのかもしれません。大変かもしれないですが、すでにアウトリーチ事業を継続して行っている自治体もあるので、参考にしながらやってみる価値はあると思います。

委員長・・・ ありがとうございます。

委員長・・・ 日程5その他について、事務局の方から何かございますか。

事務局・・・ 本日の議事要旨につきましては、後日、案を送付いたしますので、修正等あれば事務局にご連絡ください。委員の皆様からの修正を反映させたうえで、公開とさせていただきます。

6 閉会

委員長・・・ 以上で、第1回昭島市文化芸術推進基本計画推進委員会を終了します。